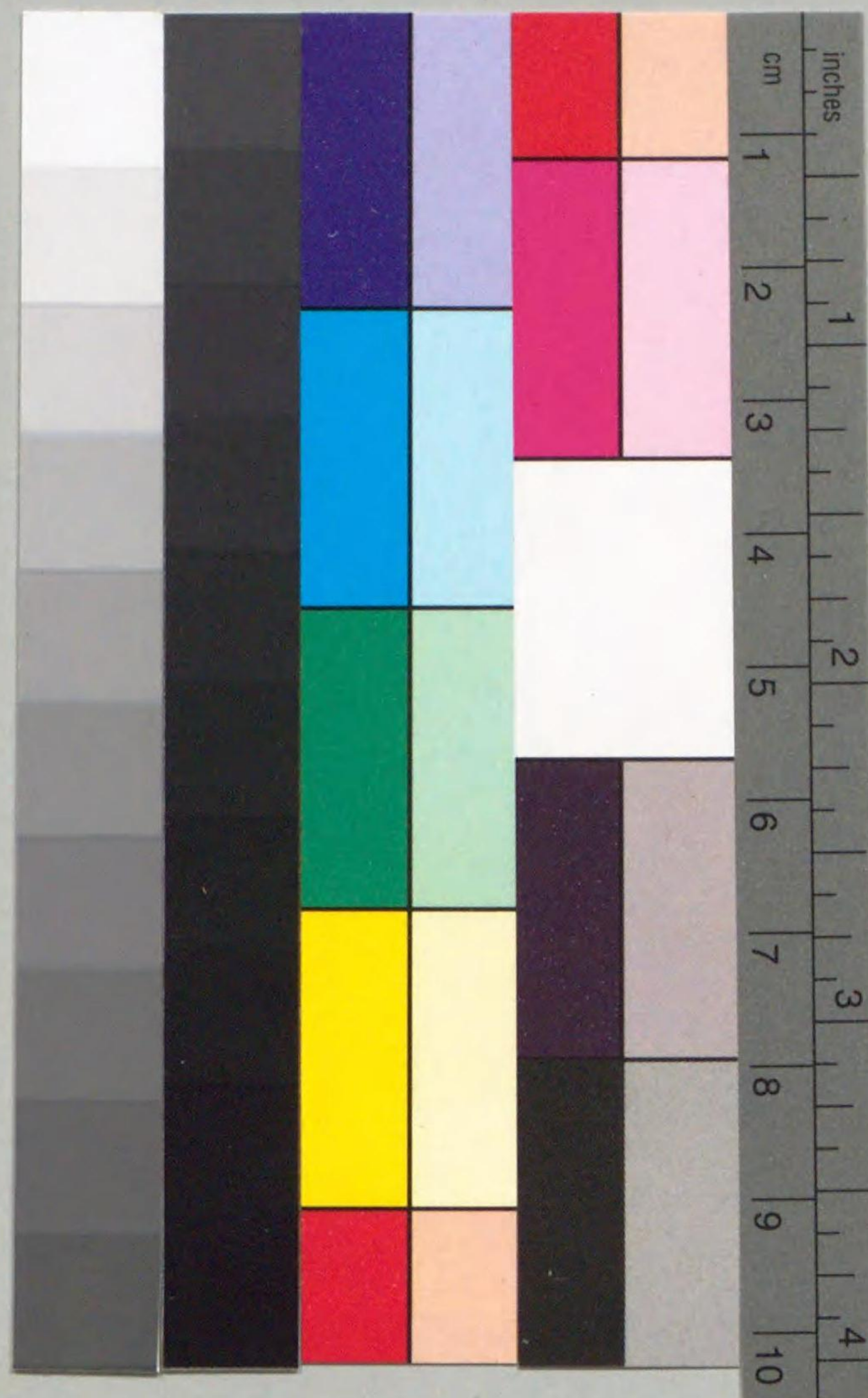
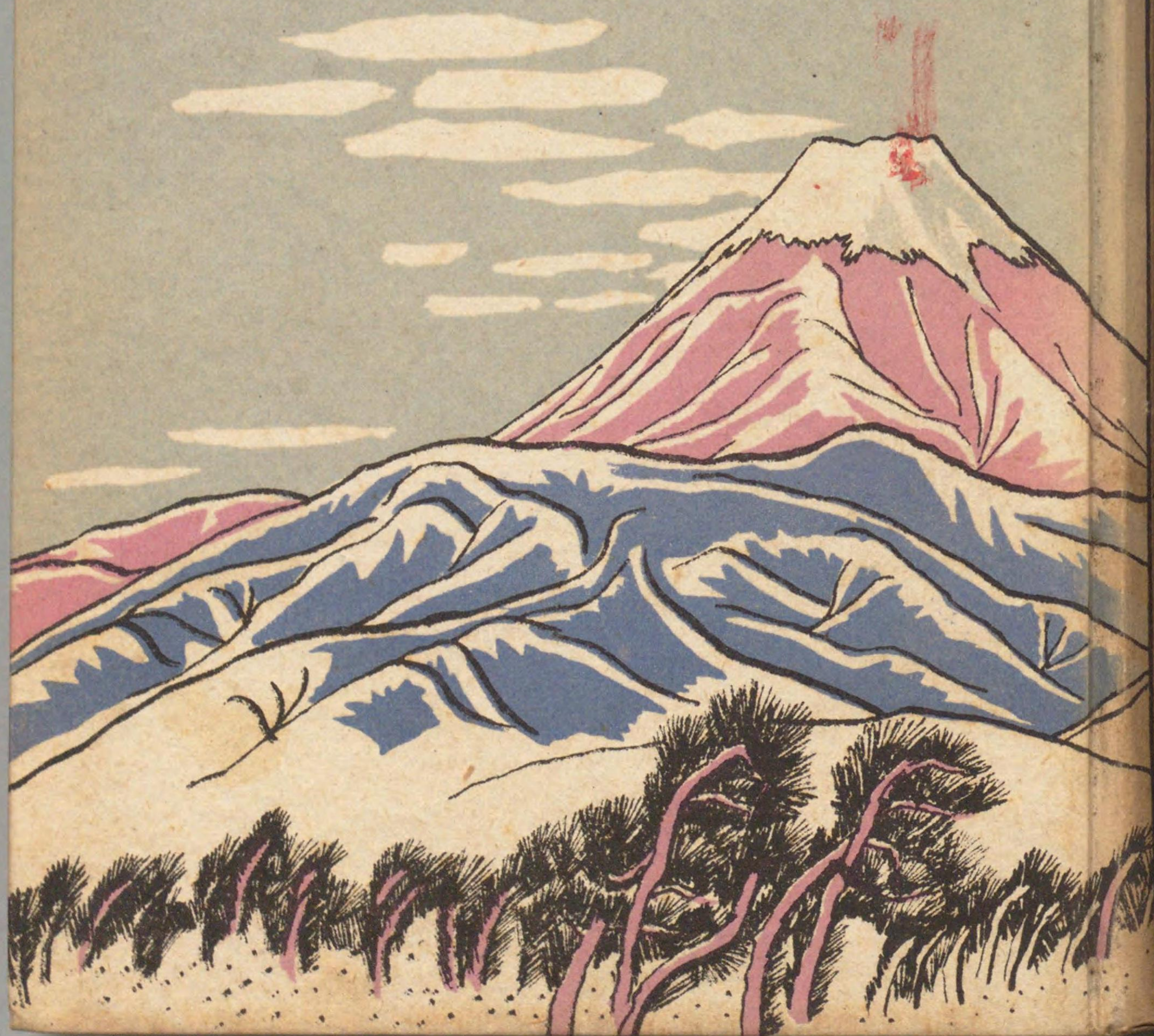


少國民詩集

# 日本の朝

水谷まさる著





少國民詩集  
日本の朝



水谷まさる著



自序

天皇 戦を宣らし給ひ、國を擧げて戦ふ。われもまた  
筆をもつて御軍みいくさに従ふ。わが歌ふは進軍歌、もつばら少  
國民のために情熱を傾けんとす。

昭和十七年盛夏

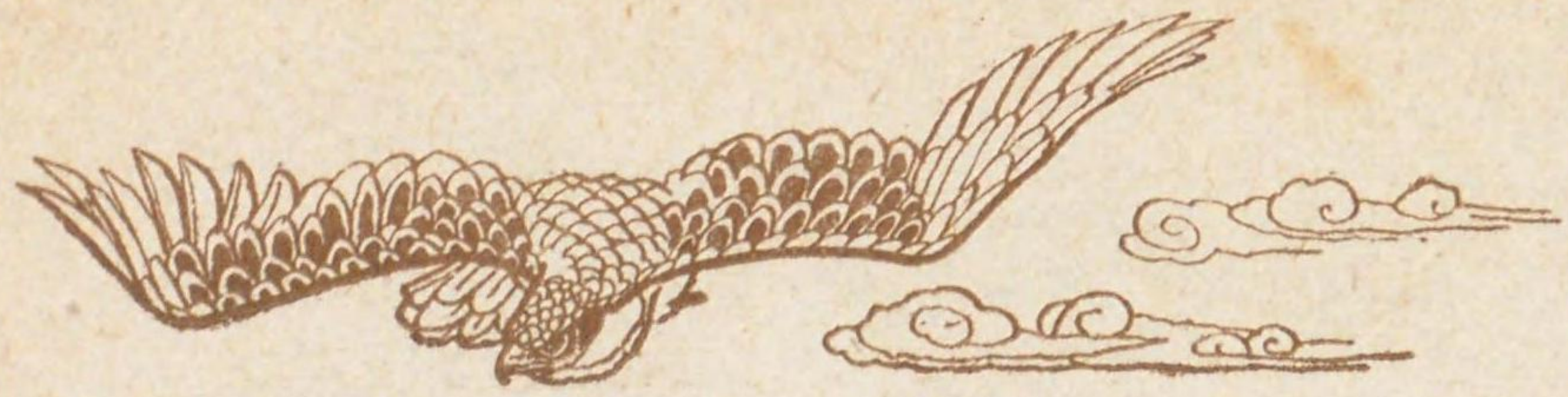
著者



\*1200300467513\*



01W13145



目次

序 詩

宮城……………三

光る朝雲

日本の海……………九

どこへでも……………一四

血……………一〇

言魂……………二五

一にぎりのお米……………三一



世界地圖……………三六

富士山……………四〇

吉日……………四四

山ゆかば

大詔……………五一

美しい顔……………五四

高千穂……………五七

清水……………六〇

さくら……………六五

敵前上陸……………六七

少年航空兵……………七〇

しほまぬ花

呪文……………七五

波……………八〇

強歩……………八四

清掃……………八八

國旗掲揚塔……………九二

南方の少年諸君……………九六

しほまぬ花……………一〇一

光る鎌……………一〇五



哨戒飛行	……	一〇八
稽古	……	一一三
開きますやうに	……	一二七
横綱	……	一三三
風呂敷	……	一三五
君臨	……	一二九
初詣	……	一三三
よつちやん	……	一三七
上陸第一歩	……	一四二

跋 文學博士 高須芳次郎  
装幀・挿畫 清水良雄

少國民詩集 日本 の 朝

序

詩





宮城

大君みます宮城

からかうと光あふれる。

反<sup>そ</sup>りをうつ高い石垣、

たくましく根を張る松、

ふかぶかと水を湛<sup>たた</sup>へる濠<sup>ほり</sup>、

おごそかな白壁の櫓<sup>やぐら</sup>。

大君みます宮城

からかうと光あふれる。

ここに來て壽ことほぎまつれ

萬世ただ一すぢに

連綿れんめんとつづく皇統

ゆるぎなき聖代みやよの榮。

大君みます宮城

からかうと光あふれる。

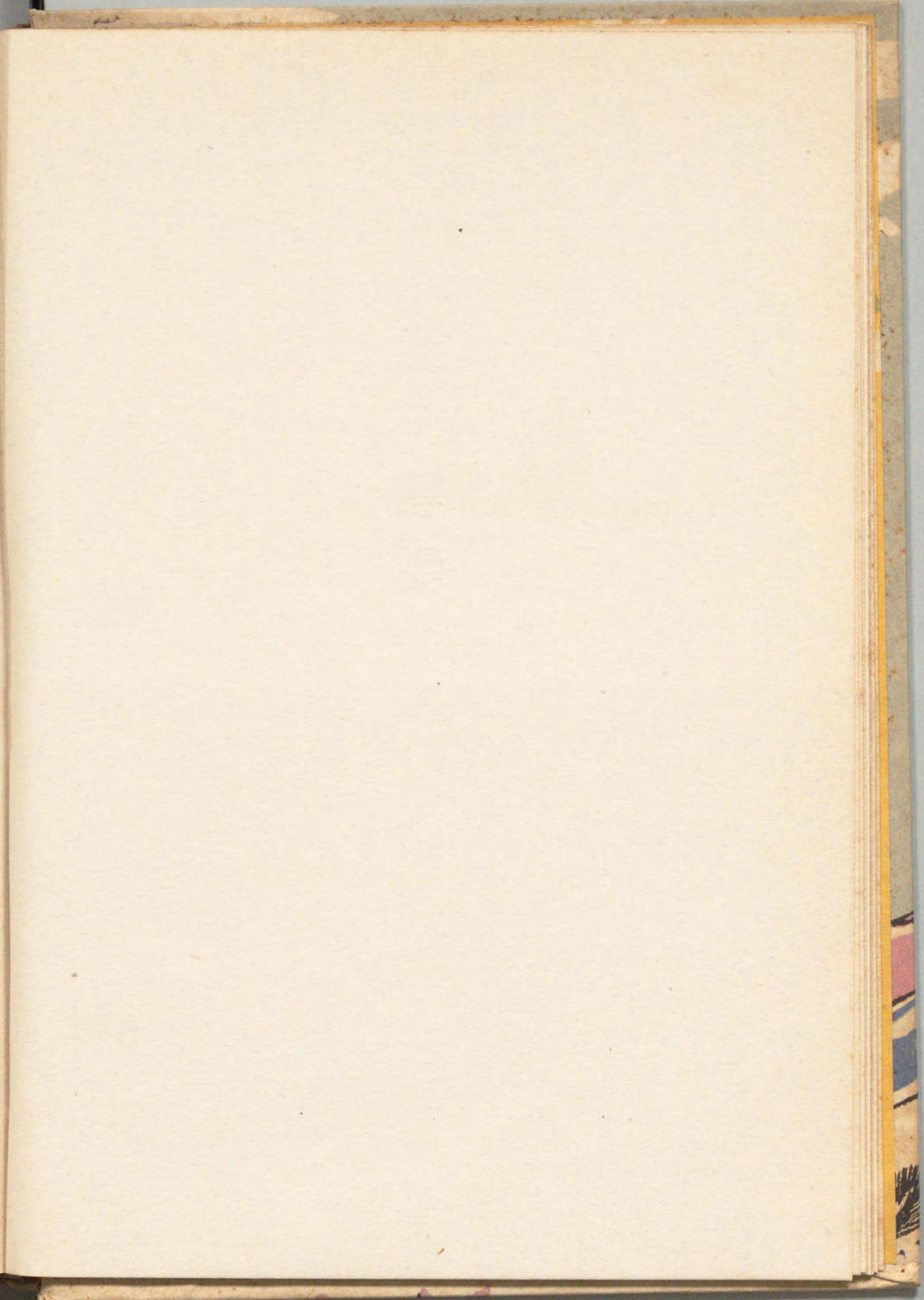
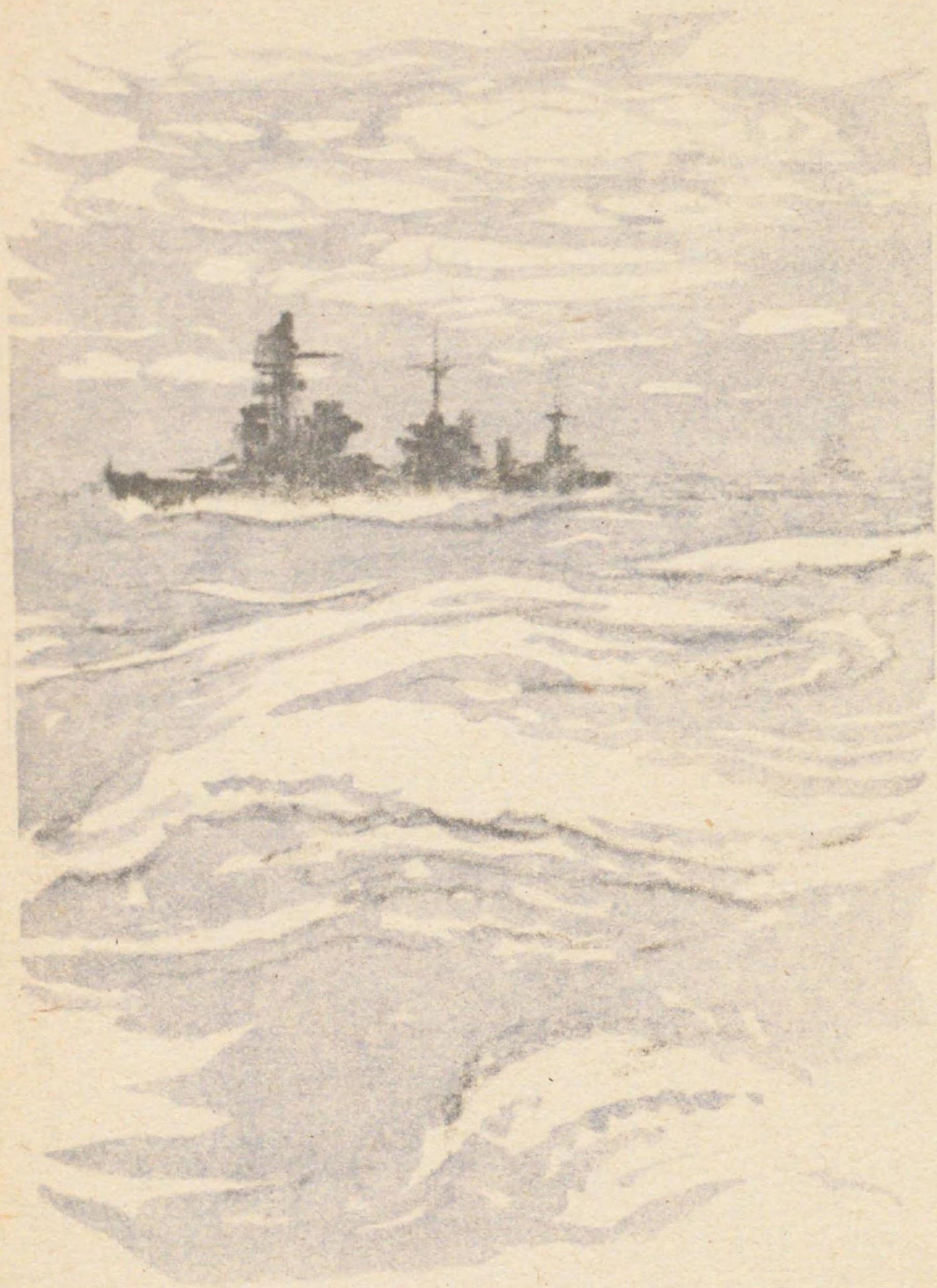
この神々かみしさ、このまぶしさ、

大君は神にぞまします、

胸あつく心せまり

つつしみて頭かぶを垂れる。

光  
る  
朝  
雲



## 日本の海

地圖をひらけ

日本のまはりに

廣い廣い海がある。

海は

コバルトに塗られ

すつきりと静かだが、

耳を澄ませば  
どどん、どどんと  
波の音が聞える。

北に南に西に東に  
はてもなくつづいて  
海はひろがつてゐる。

日本をとりまく

この広い海は  
日本の海となつた。

日本の海軍が、  
無敵の艦隊が、  
がつちりとおさへた。

目をつぶつて  
まぶたのうららに  
その雄姿をゑがけ。

風にはためく軍艦旗  
舳へさきにかがやく菊の御紋  
ちらちらと白い水兵服

はるかな水平線に

朝日がのぼり

新しい波が生れる。

そして――

その波のなかから

日本の歴史も生れる。



どこへでも

大きくなつたら  
ぼくたちの肩も  
皇國を擔ふのです。

皇國のためなら  
どこへでも行つて  
根かぎりはたらきます。

「滿洲へ行け。」

ええ、喜んで行きます。  
勇み立つて行きます。

光る鋤をうちこんで  
はてなくつづく大地を  
營々とたがやします。

一日のはたらきの後で

感謝をもつてながめる  
赤い夕陽はきれいでせう。

「アリユウシヤンへ行け。」  
ええ、喜んで行きます。  
勇み立つて行きます。

吹雪の海にいどみかけ  
波にゆられて網をおろし  
蟹や鱈をとります。

零點下二十度の  
そんな寒さのなかでも  
至誠は燃えるでせう。

「ジャワへ行け。」  
ええ、喜んで行きます。  
勇み立つて行きます。

つばの広い帽子に

灼けつく陽をよけて  
ゴム園にはたらきます。

瀧のやうに流れる汗を  
スコールで洗つたら  
どんなにたのしいでせう。

どこへ行つても  
どこに住んでも  
ぼくたちはしあはせです。

日の丸の旗の下で  
たかい誇ほこりをもつて  
宮城を遙拜します。

血

ぼくは目をつぶる

じつとじつと考へる

とほい、ぼくの先祖を。

ぼくを生んだ父

父にも父があり

その父にも父があつた。

その前にも父があり

そのまた父があり

その父にも父があつた。

たどりたどつて

考へてゆくと

三千年をさかのぼる。

とほいとほい先祖は

神武天皇さまに  
お仕へ申したであらう。

美々津の濱を出て

海路はるばるおし進み

大和へ攻め入つたであらう。

お弓にとまつた

金の鷄の奇蹟を

目のあたり見たであらう。

橿原の都のほとり

美しく咲いた櫻に

酒盃をあげたであらう。

とほいとほい先祖の

忠誠の血が、ほくの、

身體につたはつてゐる。

ほくは心を澄ます

じつとじつと考へる  
ふしぎな血のつながりを。

先祖から受けついで  
この忠誠の血を  
けがしてはならない。

大君のおんために  
血よ、たぎれ、  
血よ、燃えろ。

## 言 魂

大東亞戦争勃發して、大元帥陛下には、日夜  
政務に御精勵あそばしたまふ。母は新聞を讀  
み、おそれ多いといへり。涙とともに。

おそれ多い  
おそれ多い  
おそれ多い

ほくはいろんな場所で

いろんな人の口から  
この言葉を聞くととき  
いつだつて心をうたれた。

おそれ多い

おそれ多い

おそれ多い

大君をいただくこの國體を  
心からありがたく思ひ

日本に生れたしあはせを  
しみじみと喜ぶときの言葉。

おそれ多い

おそれ多い

おそれ多い

言葉にはいのちがある  
言魂ことだまと呼ばれるいのち  
その言魂のはたらきが

しんしんと人の心をうつ。

おそれ多い

おそれ多い

おそれ多い

この言葉の美しさ慎ましさを

やさしさ、味ひのふかさ。

花ならば菊の花かしら

清らかな匂ひを放つ言葉。

おそれ多い

おそれ多い

おそれ多い

とほい昔からいひ古され

今なほいのち新しい言葉、

日本のいろんな言葉のなかで

いちばん日本的な言葉。



おそれ多い  
おそれ多い  
おそれ多い

やがて東亞の諸民族も  
盟主日本にみちびかれ  
おのおの所を得て大君を仰ぎ  
この言葉を口にするときが来る。

### 一にぎりのお米

一にぎりのお米  
白のお米  
掌てにのせて  
しみじみとかんがへる。  
とほいとほい昔  
祖先が食べた、

その子も孫も  
その曾孫も食べた。

何十代、何百代  
づつと食べて来た、  
食べて食べて食べて  
いのちかがやかした。

長い三千年の  
たつとい歴史は

このお米で

つながれて来た。

一にぎりのお米

白のお米

瑞穂の國に

ゆたかにみゆる。

あたたかい光  
きれいな水

神さまのめぐみは  
まことにかしこく

一粒は千粒に  
千粒は萬粒に  
かぞへきれない  
億兆粒に。

秋ともなれば  
たわわに穂は垂れ

黄金の波

さわさわとゆれる。

一にぎりのお米  
白のお米  
日本人のたから  
日本人のいのち。

## 世界地圖

教室にかけてある  
大きな世界地圖に  
ぼくたちは日本の  
すがたをとらへる。

島ならぶ日本列島  
地圖の上では小さいが、

北から南へとつづく

そのかたちはなにか。

龍だ、龍だ、赤い龍だ。

雲まきおこす龍だ。

それとも、弓だ、梓弓だ、

きりりと引きしぼつた弓だ。

ぼくたちはだれもかれも  
美しいほほゑみでながめる。

龍ならば雲を得た龍、  
弓ならば矢をつがへた弓。

この國は勇武の國  
國民こそつて忠誠  
大詔ひとたび下つて  
堂々と軍はすすむ。

たちまち討ちはらふ邪惡  
礎<sup>いしやす</sup>をおく東亞新秩序

世界地圖の色分けを  
さあ、ぬりかへるときが來た。

## 富士山

富士山は日本の誇だ、  
富士山は日本の寶だ、  
この山が日本の空に  
高く美しくそびえるのは  
けつして偶然ではない。

この山こそは神さまの

たつとい贈りものだ  
日本人の心を浄め  
一つにまとめるために  
贈つて下さつたのだ。

この山のやうに氣高く  
この山のやうに美しく  
この山のやうにおごそかに  
心をつらぬき通せと  
神さまはお考へなさつた。

この山をながめるとき  
大君のことを思へ  
忠節のことを思へ  
ありがたい一君萬民の  
國體のことを思へ。

そのとき心はいきいきと  
さはやかになる、力づく。  
日本人であることが

心の底からうれしくなり  
感激の身ぶるひが出る。

だから素朴そぼくな人たちは  
昔も今もこの山を拜む。  
山を拜むのをわらふな。  
それは永久にかはらぬ  
日本のすがたを拜むのだ。

吉 日

ぼくは東京に育つたおかげで  
陛下を三度もをがみました。

ほんとに、ありがたいことです。  
陛下は自動車にお召しになつて  
静かにお通りあそばしました。

三度目は観兵式の當日で  
白馬にお召しになつてみました。

ぼくは三度とも目がしらが

ひとりでにうるんでしまひました。

なにか熱いものが心の底から

こみあげてくるのをおぼえました。

その熱いものが身體中を

電氣のやうにつきぬけて行き

立つてゐる膝がふるへました。

ぼくの身體中をつきぬけた



その熱いものはなんだつたでせう。  
ただ、もつたいない氣持としか  
いひあらはすことはできませんが、  
後あとでぼくは夢からさめたやうになり  
忠良なる臣民にならねばと  
しつかりじぶんにいひ聞かせました。  
だけど、ぼくみたいなのが、  
陛下を三度もをがめたのは  
なんとしあはせなこととせう。

お寫眞しかをがんだことのない  
かずおぼくの國民があるのに  
三度も機會をめぐまれたのは  
なんだかすまないやうな氣がします。  
考へれば、生れてから十五年  
その月日のなかのこの三日は  
忘れられない佳よい日です。  
ぼくにとつての吉日です。  
三日ともうららかに晴れ

大空には光がみちあふれ  
青く澄みわたつてをりました。

山  
ゆ  
か  
ば



名千穂  
山  
為

大 詔

昭和十六年十二月八日  
まつろはぬもの滅せと  
大詔は煥發くわんぱつされた。

大詔は光の征矢せいや  
國民の胸をのこらず  
はつしとつらぬいた。

國民は大きな決意に

かたくぎゆつと唇をむすび  
あつい涙を目にたぎらした。

老いたるものも若きものも  
やつとももの心ついた子供も  
一つの心にむすびついた。

神々は天そらにいでまして

ほほゑみをうかべながら  
照覽せうらんあらせたまふた。

その日の日本のすがたこそ  
さやけくも美しく  
山も海もかがやきわたつた。

心なき鳥獸蟲魚さへも  
大き御稜みりょう威つをかしこみて  
しんと静まりかへつた。

美しい顔

青く晴れわたつた  
パレンバンの空に  
落下傘がひらいて  
たくさん降りて行つた。  
ふはりと風をはらんで  
まんまるくひらいた

まつ白い落下傘は  
天に咲いた花だ。

さうだ、さうだ、花だ。  
美しい花だ。  
だが、その花の下に  
もつと美しいものがある。  
君は知つてゐるか。  
むろん、知つてゐる。

それは兵隊さんの  
忠義にみちた顔だ。

大君のおんために  
敵地へ降りて行くとき  
兵隊さんの顔は  
美しい神さまの顔になる。

## 高千穂

高千穂は雲にそびゆる  
雲湧き雲ながれて悠久。

この峰に神々下り立ちて  
眞實をかがやかしたまひき。

日本の道ここにはじまり

直<sup>なほ</sup>くまた正しく萬古<sup>ばんこ</sup>につづく。

かしこくも大君は神の御裔<sup>みすえ</sup>  
この道を履<sup>ふ</sup>みゆきたまふ。

ああ、この神國<sup>しんこく</sup>に生れ來<sup>こ</sup>し  
われら皇民のしあはせよ。

大君を神とあがめ奉りて  
たぎり立つ忠誠の血潮。

謹しみて大君の御後<sup>みあと</sup>につづき  
この道をゆく、こそりてゆく。



清 水

天神山の清水は  
清くつめたい。  
晝となく夜となく  
こんこんと湧き出る。

あふれてながれて  
岩のあひだに

澄みたたへ  
透きとほる。

手をひたせば  
手は切れさう  
口にふくむと  
齒にしみわたる。

うるはしい国土の  
うるはしい清水

飲めばたちまち  
心さはやか。

淡々<sup>たんたん</sup>としてあまい  
その味はひ、  
ほのぼのとかをる  
日本の味。

マレーの戦ひで  
戦死した兄さんの

最後の望みは  
この清水だった。

「水が飲みたいなあ  
ふるさとの山清水」  
ごくごく咽喉<sup>のど</sup>を鳴らして  
さぞ飲みたかつたらう。

清水は日本のたから  
たつといめぐみ

國土と人とを

ゆたかにうるほうす。

さくら

靖國の社頭のさくらは  
あかるく美しい花の雲。

ふりこぼれる春のひざしに  
さんらんとしてかがや耀きわたる。

ああ、光りのなかのさくら、

さくらに想ふたつとき武勳。

ここに神鎮まれます忠魂も  
さんらんとして耀きたまふ。

大君のために、皇國のために、  
いのちかへりみもせず、

ひたすらに、一すぢの道、  
ゆきゆきて永久に耀きたまふ。

### 敵前上陸

壯烈なる敵前上陸は  
いささかの逡巡も許さぬ。

皮を斬らして肉を斬る  
すさまじい戦闘方式。

大君のために戦ふとき

ふしぎな勇氣が充ち充ち

銃砲火とどろくなかを  
ひたすらなる突撃突進。

鐵兜の下にあるのは  
世にも美しい必死の顔。

そのとき勇士たちは悉く  
相模太郎時宗となり

たくましい肩の上に  
皇國の運命を擔ふ。

ああ、歴史の時宗は一人  
昭和の時宗はかず知れず。

## 少年航空兵

君は少年航空兵

しつかりと操縦桿さうじゆうかんを握る。

君は目をかがやかして空を睨にらむ。

雲あれば雲を割きき

風あれば風を斬り

君ははてもなく空を翔かける。

君は少年航空兵

しつかりと操縦桿を握る。

君は耳を澄まして空を睨む。

高くなる爆音は

一億國民の歡呼だ

君の耳にながれこむ。

君は少年航空兵

しつかりと操縦桿を握る。

君は唇くちをむすんで空を睨む。

美しい國土は下にある  
この國土の空をまもるのだ。  
君の一念は澄みちぎる。

君は少年航空兵  
しつかりと操縦桿を握る。  
君は眉をあげて空を睨む。  
大君にささげた<sup>いのち</sup>生命  
いささかの不安もなく  
ひたすら爆撃に行く日を待つ。

しほまぬ花





呪文

もしも勉強に倦あきてしまひ  
もうやめようと思つたら  
しつかりと三度唱へたまへ。

月月火水木金金

月月火水木金金

月月火水木金金

なんとふしぎな呪文じゅもんだらう

日照りつづきでしほれた葉が

夕立でしやんと立ちなほるやうに、

ほうれ、きみの疲れた心は

たちまちしやんとよみがへり

すがすがしい氣力があふれる。

そのとき、むろんきみは思ふ。

黒潮さわぐ海上はるか

わが海軍の猛訓練を。

米英が奸策かんさくで押しつけた

五・五・三比率の劣勢を

補はねばならなかつた。

黙々として二十年

將兵の必死の訓練には

日曜と土曜がなかつた。

つひに米英と戦ふ日が来た。

緒戦から勝利をさめて

永い努力に榮光がかがやいた。

怠け心が頭をもたげるとき

忘れずに三度唱へたまへ

このすばらしい呪文を。

月月火水木金金

月月火水木金金

月月火水木金金

波

波が寄せてくる  
うねつて寄せてくる。  
どどんと岩にぶつかり  
ざざざと砕ける。

波の寄せる岩に  
ぼくは突つ立つてゐる。

兩足をふんばつて  
ぐつと胸を張つてゐる。

波は白く砕ける  
花となつて砕ける。  
ぼくのシャツとパンツは  
しぶきを浴びてぬれる。

波はたえず岩を洗ひ  
ぼくの心をも洗ふ。

おとそかな波の唄に  
神々の聲がこもる。

とほい昔から日本の  
岸にうら寄せる波は  
大和民族の歴史に  
美しい伴奏をした。

ぼくは空を見る、海を見る。  
寄せては返す波を見る。

波の唄を聞きながら  
ぼくの夢はひらく。

「かならずなつて見せるぞ、  
日本のためになる人に」  
ぼくは力いつぱい叫び  
かたく波と約束する。

強 歩

ぼくたちは歩いた。  
ぐんぐん歩いた。

胸を張つて

手を振つて

大股おほまたに、しつかりと。

大地を踏んで歩いた。

ぼくたちの頭上には

青い空があつた。

小さな白い雲が

あこがれと

のぞみとを

ぼくたちの胸に湧かした。

ぼくたちの脚は

みんな強かつた。

疲れを知らなかつた。

ぼくたちは野を越えた。  
丘を越えた。  
林をぬけた。

ぼくたちの脚は  
日本の脚だ。  
シベリヤの雪を踏み  
大陸の道を行き  
ジャングルをくぐる  
鐵の脚だ。

ぼくたちは歩いた  
十キロの強歩だ。  
ただ一人の  
落伍者もなく  
膝をあげて歩いた。  
列をみださず歩いた。

清 掃

教室の清掃だ。

はたきをかける。箒で掃く。

塵ひとつ残さぬやうに

ぼくたちは丹念に掃き清める。

それがすむと拭き掃除だ。

かたく雑巾をしぼつて

ぼくたちはごしごと

机を拭く窓を拭く床を拭く。

すべてのよごれよ去れ

すべてのけがれよ去れ

教室を清めろ

教室を磨け。

青葉の窓から吹きこむ

すがすがしい微風のなかで、



心はあかるい無念無想  
みんな黙々とはたらく。

清掃はぼくたちの行だ。  
うちこめ、つらぬけ、  
教室を清めるとともに  
ぼくたちの心をも清める。

やがて清掃やめの呼笛が  
ピリピリと鳴つたとき、

ぼくたちは雑巾を持つたまま  
立ちあがつて先生に禮をする。

それから、ぼくたちはかたはらの  
友だちとほほゑみ合ひ、  
清められた神聖な教室を  
満足とともに眺める。

## 國旗掲揚塔

ぼくたちの学校の國旗掲揚塔に  
へんぼんと國旗がひるがへつてゐる。

ぼくたちはたんぼでいなどを取り、  
山でどんぐりの實をあつめ、  
收穫後の刈田で落穂をひろひ、  
冬の夜業に藁細工をつくり、

それを賣つたお金を合せて、  
國旗を買ひ掲揚塔を立てた。

ぼくたちの一人一人の力は  
まことに小さいけれども、  
結集すればこんなにもすばらしい。  
そのことがはつきり形にあらはれ  
ぼくたちの目にうつるので、  
ぼくたちは誇りをもつて國旗を仰ぐ。

ぼくたちの學校の國旗掲揚塔に  
へんぼんと國旗がひるがへつてゐる。

ぼくたちは國旗のはためく音に  
美しい日本の歴史を讀む。

白地は立國の正義を意味し

赤は國民の忠誠を意味する。

三千年の日本の歴史は

正義と忠誠でつらぬかれてゐる。

ぼくたちはこの國旗を仰ぐとき

ぼくたちの學校は日本の學校で

ぼくたちの教室は日本の教室で

ぼくたちは日本の少國民で

新しくつくられる歴史のために

動員されてゐることを心にうなづく。

## 南方の少年諸君

南方の少年諸君

君たちはさぞ驚いたらう、  
夢ではないかと思つたらう。  
日本の強い軍隊が  
スコールよりも烈しく  
イギリス軍に襲ひかかり  
根こそぎうちのめしたとき。

南方の少年諸君

見えない鎖はちぎれ  
見えない重石は碎けて  
君たちの民族の歴史に  
新しい夜明けが来た、  
君たちは涙のなかに  
大日輪を仰いだであらう。

南方の少年諸君

ぼくたちは知つてゐる  
君たちの大きな喜びを、  
また、その喜びのなかの  
湧きあがり、たぎり立つ  
日本へのあつい感謝を。

南方の少年諸君

あまたの日本の勇士は  
君たちのために戦死した、  
君たちは赤い花を摘み

墓前にお供へしたはずだ、  
そのときの感動を  
永久に忘れてはならぬ。

南方の少年諸君

君たちは虎の子だ、鰐の子だ、  
強く正しくたくましい、  
さあ、自信をもつて起ちあがれ、  
野を馳けろ、林を走れ、  
川に泳げ、海に往け、

君たちをさへぎるものはない。

南方の少年諸君

もう壓制も搾取もない、

東亞は美しくかがやいてゐる。

さあ、ぼくたちと心を合せ

しつかりと手をつながう。

日章旗たかくかざして

建設の歴史をつづらう。

### しほまぬ花

ぼくは葉書を持つてゐます、

ぼくには花のやうに美しいのです。

それは罐詰の空罐でつくつた

カンテラの灯の下で

勇士が書いた葉書です、

ぼくの慰問文の返事です。

この葉書が来たとき  
庭のさくらが咲いてゐました。  
ぼくはその花びらを封じて  
すぐに返事を出しました。  
けれど、勇士からはふたたび  
返事は来ませんでした。

来ないはずでした、

勇士はこの葉書を書いたつぎの日、  
砲煙弾雨のなかをくぐり

勇ましい突撃をつづけ  
天皇陛下萬歳と叫んで  
ををしくも戦死なさいました。

そのことをずつと後で知つて  
ぼくは葉書を取り出しました。  
思はずながした涙で  
葉書をよごしましたが、  
葉書はかがやきわたり  
神咲かせたまふ花となりました。

ぼくは葉書を額に入れ  
机の前の壁にかけました。  
これはけつしてしぼまぬ花です  
机の上の花瓶に花はなくても  
この花ばかりはいきいきと  
ぼくの心のなかで咲いてゐます。

## 光る鎌

軍馬のために  
さくさくさく  
光る鎌で  
草を刈る。

同級生の奉仕  
五十八人



だれがいちばん  
刈るだらう。

口ずさむ

勤勞の歌

疲れを知らぬ

手がはずむ。

大き御軍みいぐさは

ここにもある

光る鎌は  
ぼくらの武器。

草の匂ひ

朝の風

目にさやか

露草の花。

## 哨戒飛行

ふと目をさますと  
耳をうつつ爆音、

一機、二機、三機

あかつきの哨戒飛行だ。

六百萬市民は

まだ寢床のなか

まぶたは貝殻のやうに  
きつちりと閉ぢてゐる。

そのあひだも絶え間なく

大空を哨戒する

この哨戒飛行の

なんといふありがたさ。

空にはきびしい寒さが  
みなぎつてゐるだらう。

身をかためた飛行服にも  
寒さはしんとしみるだらう。

けれど、寒さもものかは  
雲をくぐつて空を翔ける  
飛行眼鏡のかけには  
帝都防衛の決意が光る。

ぼくは寝てゐるのがすまない、  
すぐに蒲團を蹴つて起きる。

寝巻を着かへると窓を開ける、  
あかつきの空に目をこらす。

けれど空はまだうす暗い  
機影は目にはいらぬ。  
そのときぼくははつとした、  
梅の花が匂つてゐる。

さうだ、哨戒飛行の操縦者は  
この花に似かよつてゐる。

りんと咲く梅の花よ、匂へ匂へ、  
あの飛行機まで高く匂へ。

稽古

剣道の先生は竹刀をかまへて

「さあ、うつて来い」といった。

ぼくは丹田に力をこめて

大上段に竹刀をふりあげた。

「えい」と精いつぱいのかけ聲で

ぼくは先生のお面を強くうつた。

竹刀の音は高く鳴りひびいたが  
先生は「まだまだ」といつた。

ぼくは何度も何度もくりかへし  
しつこくお面をうつて行つた。  
だが、しだいに腕から力がぬけ  
いつか丹田の力もぬけてゐる。

身體は汗でびつしよりになり  
額から流れた汗が目に入る。

ぼくは目をばちばちしばたいて  
また丹田に、ぐつと力をこめる。

重くなつた竹刀をやつと握りなほし  
よろよろする足を踏みしめた。

「えい」と、ぼくは踏みこんで行き  
先生のお面を根こゑかぎりうつた。

「よしよし、その意氣だ、その意氣だ。」  
先生の聲にほつとしたとき

ぼくの心をつきぬけたのは  
山上の風のやうな爽快さだつた。

開きますやうに

神さまにいのりながら  
みんなで縫つたのよと  
姉さんがいひました。

だけど、その落下傘に  
もし故障があつたらと  
眉をひそめていひました。

ほころびでもしたら  
どうしようかしらと  
目を伏せていひました。

大丈夫だとは思ふけど  
とても心配なのよと  
涙をたたへていひました。

どうか開きますやうに

白い花みたいにと  
力をこめていひました。

それから時<sup>とき</sup>が過ぎました。  
皇軍落下傘部隊は  
敵地を目がけて降りました。

うれしい、開いたわ  
一つも故障なしにと  
姉さんは喜んでいひました。

お友だちと、今日は  
抱き合つて泣いたのよと  
涙をこぼしていひました。

ああ、ありがたい

お國のお役にたつたわと  
目をこすつていひました。

この指が、この手が

大きな務めをしたのねと  
聲をつまらしていひました。



横綱

双葉山が

土俵にのぼつたとき

ぼくは息をこらして見た。

巨きな身體

隆々と盛りあがる筋肉

きれいな皮膚はほの紅あかかつた。

どしんどしんと

四肢しごを踏んだとき

指さきにまで力がみなぎつた。

眞一文字に

ぎゆつとむすんだ唇

眼はやさしいが威があつた。

おちついた

自信に充ちた態度

あれが横綱の貫録くわんろくだった。

十枚の

優勝額をかかげるのは

なんと大きなほまれだらう。

双葉山の

真剣な努力の積み重ねかさねに

ほくは頭がさがった。

## 風呂敷

きみは風呂敷について

考へたことがあるか、

ただ一枚の布きんにすぎないが、

美と実用がむすびついてゐる。

風呂敷はすばらしい智慧の

みづみづしいあらはれだ。

たためば小さくなり  
ひろげれば大きくなる、  
なんでもつつみこんで  
ぎゅつと結ぶ花むすび、  
風呂敷づつみは美しく  
なにやら床しいではないか。

ところで風呂敷の創案者さいあんしゃを

きみは知つてゐるか、

ぼくは知らない、おそらくは

きみも知つてはゐないだらう。

ぼくはいろんな人に尋ねてみた  
けれど、だれも知らなかつた。

民謡といふものが

草木のそよぎのやうなもので

これといふ作者の名前が

残つてゐないやうに

風呂敷を創案した人の

名前も残つてゐない。

風呂敷、風呂敷、風呂敷、  
とほいとほい昔から  
日本人の生活のなかで  
美と實用をほしいままにして  
黙々と日本人のために  
奉仕をつづけて來た風呂敷。

### 君臨

ほの暗い谷をぬけて  
尾根道へ出たとき、  
ふいに思ひがけなく  
遠く富士山が見えた。

こんな方角に  
富士山が見えやうとは、

幻まほろしではないかと  
目をうたがったが、

おお、このひとときの  
澄みとほるよろこび、  
ゆたかにあふれる  
美ほふえつの法悦。

浅黄色の夕空を  
きりりと、くぎつて

そそり立つ富士山の  
美びの豪華版。

いつ、どこで見ても  
富士山の美しさを  
素直すなはに受け入れる  
わたしではあるが、

この尾根道で見た  
この思ひがけない姿は

今もなほあざやかに  
わたしの心に君臨する。

初詣

雲むらさきに  
たなびいて  
鉾杉の森の  
奥深く  
御社の屋根に  
初日がさしてゐる。

珠敷く小砂利を  
ふんでゆけば  
ここの静けさの  
とほとくて  
遠い神代が  
偲ばれて来る。

ふとかすめる  
なにかの影  
目をあげれば

つばさも軽く  
飛び交ふ  
白い鳩のむれ。

ちよろちよると  
湧き出る  
御手洗で  
口そそぎ  
手を洗へば  
心すがすがしい。

社殿の前で

柏手かしはでをうつ、

年の始めに祈る

ただ一つのこと、

わが國威

高くあげさせ給へ。

よつちやん

幼稚園の庭のまはりに

赤いつつじが燃えてゐる。

その赤い色にもまけない

赤いほつべたを輝かして

かはい園児たちが

先生のオルガンにつれて

お遊戯をしてゐる。



小さなお手々をつないで  
丸く輪になつたところを  
高いところから眺めたら  
きつと大きな大きな  
大輪の花のやうだらう  
花はときどき開いたり  
つぼんだりしてゐる。

わたしは垣根の外に

じつと立ちつくす。  
あどけない笑くぼを  
いつたい幾つ見たらう。  
たのしい笑ひごゑを  
いつたい幾つ聞いたらう。  
ああ、みんな幸福さうだ。

ふと目についたのは  
足のわるいよつちやん、  
お父さんが戦死なされて

そのお葬式のとくに  
さびしさうに、うつむいて、  
小さな手で焼香しやうかうして  
みんなを泣かせたよつちやん。

そのよつちやんも今日は  
晴れ晴れとした顔つきだ。  
さびしい影はのこらず  
ふるひ落してしまつて  
足のわるいことも忘れてゐる。

わたしはほつと心やすらぎ  
ああ、よかつたなと思ふ。

よつちやんよ、よつちやんよ。  
あなたが元氣でたのしければ  
戦死なされたお父さんも  
きつとお喜びなさるだらう。  
あなたの白いエプロンを  
涙でよごしてはいけません  
わたしは心でさけんでゐた。

## 上陸第一歩

長い三十年の月日を  
海外でひとり暮して  
なつかしい故國日本へ  
歸つて來る人があつた。

日本を出て行つたときは  
まだ三十代の若者だつた、

今は髮の毛は白くなり  
苦勞の皺しわがきざまれてゐた。

この人はむろんうれしかつたが  
汽船も日本へ近づくのが  
うれしいらしく、機關の音を  
快活にひびかせてゐた。

空は高く澄みわたり  
白い雲がながれてゐた、

空にはもう秋が來てゐて  
蕭々せうせうと風が吹いてゐた。

空と海とをくぎる

遠いほのかな線の上に

日本の陸地の影は

いつ現はれて來るだらう。

この人は明るい顔をして  
ほほゑみながら待った。

ときには、ぢれつたさうに  
甲板を歩きまはつてゐた。

やがて、日暮近く

はるかな陸地が見えて來た。  
つらなる山脈が夢のやうに  
海の上に浮びあがつた。

おお、その山脈のなかに  
一きは、ぬき出て高い山。

ああ、富士山だと

この人は思はず叫んだ。

むかしながらの富士山が  
心をゆり動かした。

この人は手すりにつかまり  
かがやく瞳ひとまをこらした。

けれど、じんじんと涙がわき  
わいた涙はあふれ出て

頬をつたつて落ちた。

ぎくぎく兩脚はふるへた。

もしも手すりがなければ  
この人は倒れたであらう、  
力いつぱい手すりを握り  
なほも富士山を見つめた。

三十年の月日の底に  
しづんでゐた思ひ出が

ひとつひとつなつかしく  
目ざめて来たのだった。

ふるさとの山や川の景色、  
はじける栗、色づいた柿、  
友だちのこと、先生のこと、  
まだ若かつた両親のこと。

そのあひだも汽船は進み  
つらなる山脈も富士山も

しだいに大きくなり  
くつきりと浮びあがつた。

富士山の色はしだいに  
變つていった。  
うす青からむらさきに  
むらさきから茄子紺に。

やがて、夕陽を受けて  
富士山はかがやいた。

ばら色に、燃えあがる紅に、  
それは美しくおごそかだつた。

おおと、その人は叫んだ、  
富士山こそ日本の柱だ。  
美しくおごそかに  
日本をささへてゐる。

そのとき、日本の國體が  
ありがたくたつとく思へた。

家族制度、人情、習慣

あらゆるものがたつとく思へた。

その人は富士山を眺めて  
身についた外國のほひを  
すつかりふり落して  
力づよく上陸第一歩を踏んだ。

## 跋

日本精神は今日、全日本に行きわたつてゐるやうであるが、その實、眞に之が神髓を把握せるものに至つては割に少い。殊に少年少女に向つて、分り易く、日本精神の神髓を説く必要が大いにある。かくして日本精神が深く實踐のうへに持ち來たされることが肝要だと思ふ。

水谷まさる氏は、久しく日本主義思想雑誌『祖國』編輯長として夙に日本精神を體得し、この方面に多大の情熱と深き信念とを有し、造詣するところが多い。且つ童話文學の大權威だ。氏が今回少國民詩集『日本の朝』を完成して、



朝の日本 少年詩集

出文協承認 ア300137號

不許複製



昭和十七年十二月三日印刷  
昭和十七年十二月八日發行

(四〇〇〇部)

定價金一圓七十錢

(送料十五錢)

著作者

水谷 まさる

發行者

小糸 勝次郎

印刷者

内田 柳次郎

東京市小石川區大塚坂下町一三六番地

會員番號第一〇七〇四一番

東京市豐島區駒込一丁目二八番地

發行所

配給元

東京市豐島區駒込一丁目二八番地

電話大塚(06)五八五八番  
振替東京六一七〇一番

金蘭社

東京市神田區淡路町二ノ九番地 日本出版配給株式會社

詩的に日本精神を鼓吹、之が徹底化を計られたことは何より有意義で喜ばしい。すべての少年少女は、『日本の朝』により、日本精神の神髓を體得してほしい。茲に氏の新詩集の前途を祝福し、海の内外にひろく普及せんことを祈願する。

昭和十七年十一月

文學博士 高須 芳次郎

文部省編纂圖書  
文學士 森岡美子著

萬葉集物語

B6箱入本文四百十頁  
三色版口繪二枚着色挿繪六枚  
外寫眞版・凸版挿繪十個  
定價金一圓九十錢送料十五錢

部一の容内

- 一、はじめに(解題)
- 二、萬葉時(政治と)
- 三、天子は神代(皇室)
- 四、遣唐使の(外)
- 五、萬葉人の(生活)
- 六、吉野の(紀行)
- 七、悲しみの(歌)
- 八、大宮人の(生活)

日本兒童文化協會編  
これこそ日本人

B6箱入本文三百九十六頁  
三色列口繪外挿繪二十四  
定價金二圓二十錢・送十五錢

容内

- 東郷平八郎
- 福島安正と愛馬
- 山岡鐵太郎
- 遠川慶喜
- 徳川慶喜
- 野村望東尼
- 葛原勾當
- 鹽原多助
- 蒲生君
- 大本間光
- 大石良
- 加藤清
- 日本藤清
- 武尊公正

水谷まさをる童話集  
初山 滋登

B6箱入本文二百四十頁  
三色版口繪外凸版挿繪多數  
定價金一圓八十錢送料十五錢

五つの春風  
細い竹笛

以下續刊

淺澤青花童話集  
佐倉愛土登

規格B列六號箱入  
本文二百九十六頁  
三色版口繪外挿繪十枚  
定價金一圓七十錢・送十五錢

片山 稔著  
新しい支那の子

規格B六號箱入本文二百七十頁  
三色版口繪外挿繪十枚  
定價金一圓六十錢送料十五錢

東京府立北野高女教諭  
文學士 結城陸郎著・清水義雄裝幀

少國民文化大日本史

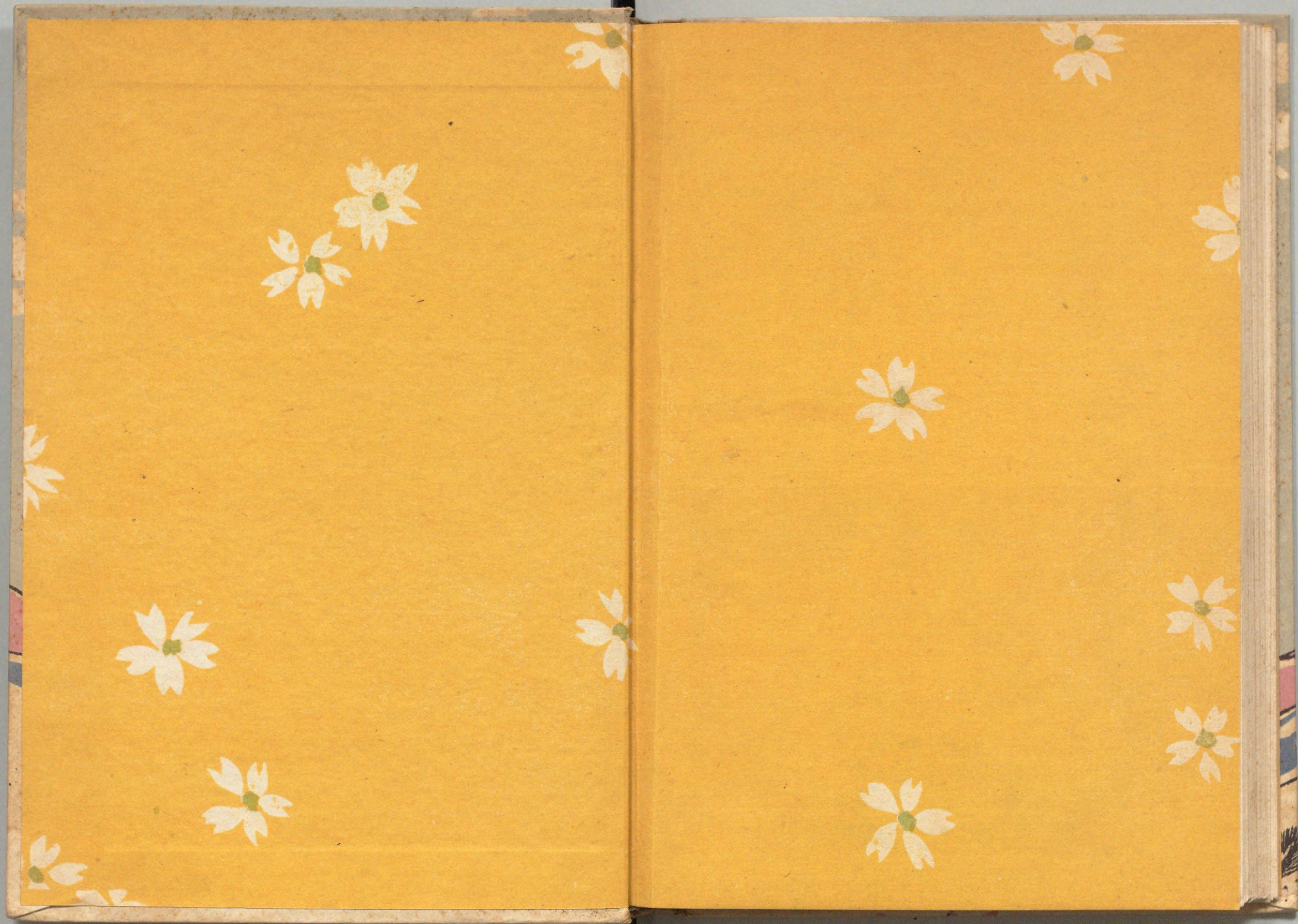
B6判箱入本文四百餘頁  
三色版口繪外挿入圖八十餘  
定價金二圓廿錢送料十五錢  
日本文化史の正確な知識を理解せしむると同時に日本精神を體得しむるため、國民學校六年以上特に青年學校生徒のために、數十個の圖版を挿入して興味深く記したるもの。

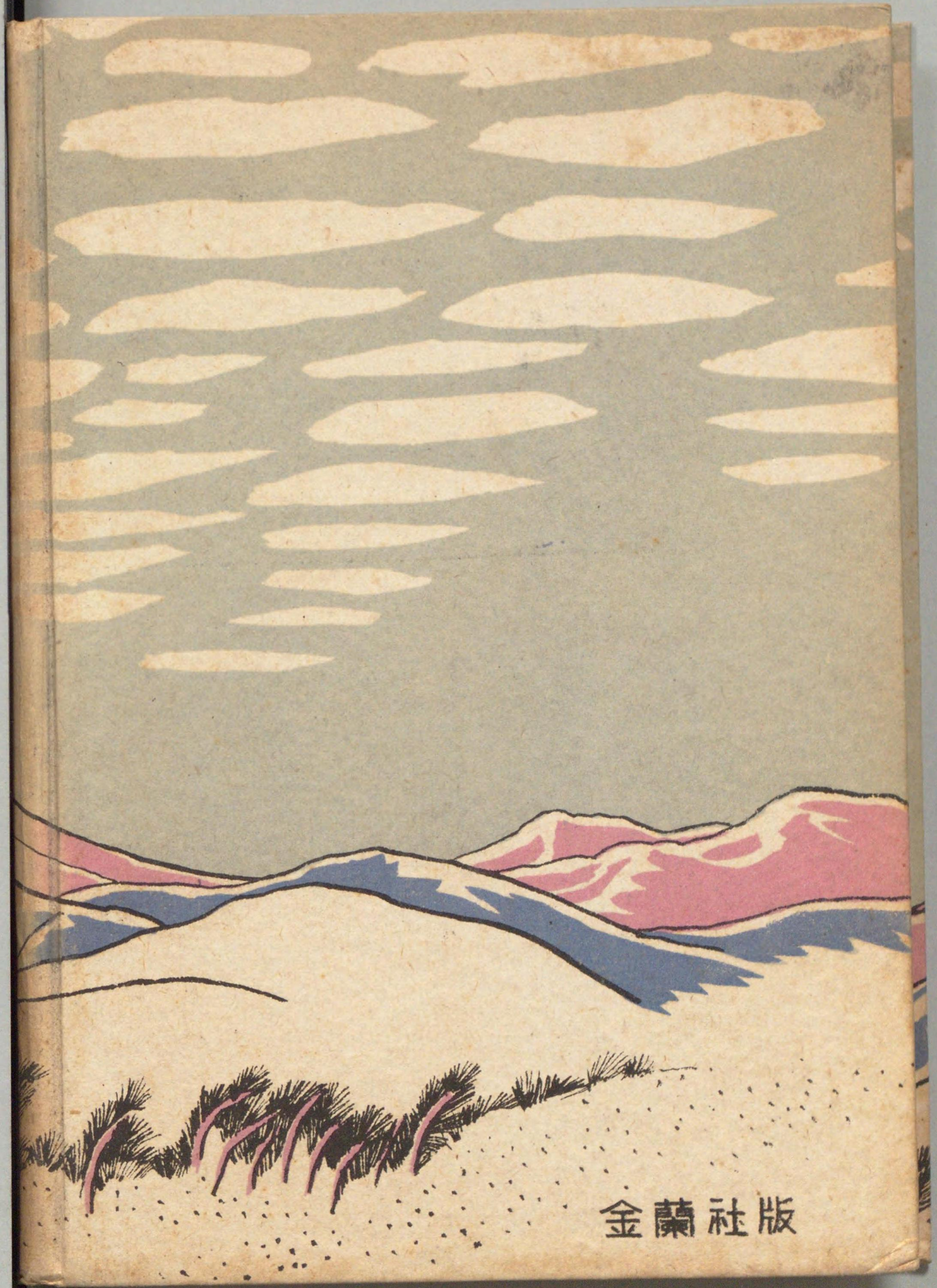
新進童話作家の  
新體制童話集

四六判箱入・本文二百五十頁  
三色版口繪外挿繪十枚  
定價金一圓五十錢・送十五錢

片山 稔著

王少年物語(五・六年生用)  
奈街三郎著  
箱(四・五年生用)





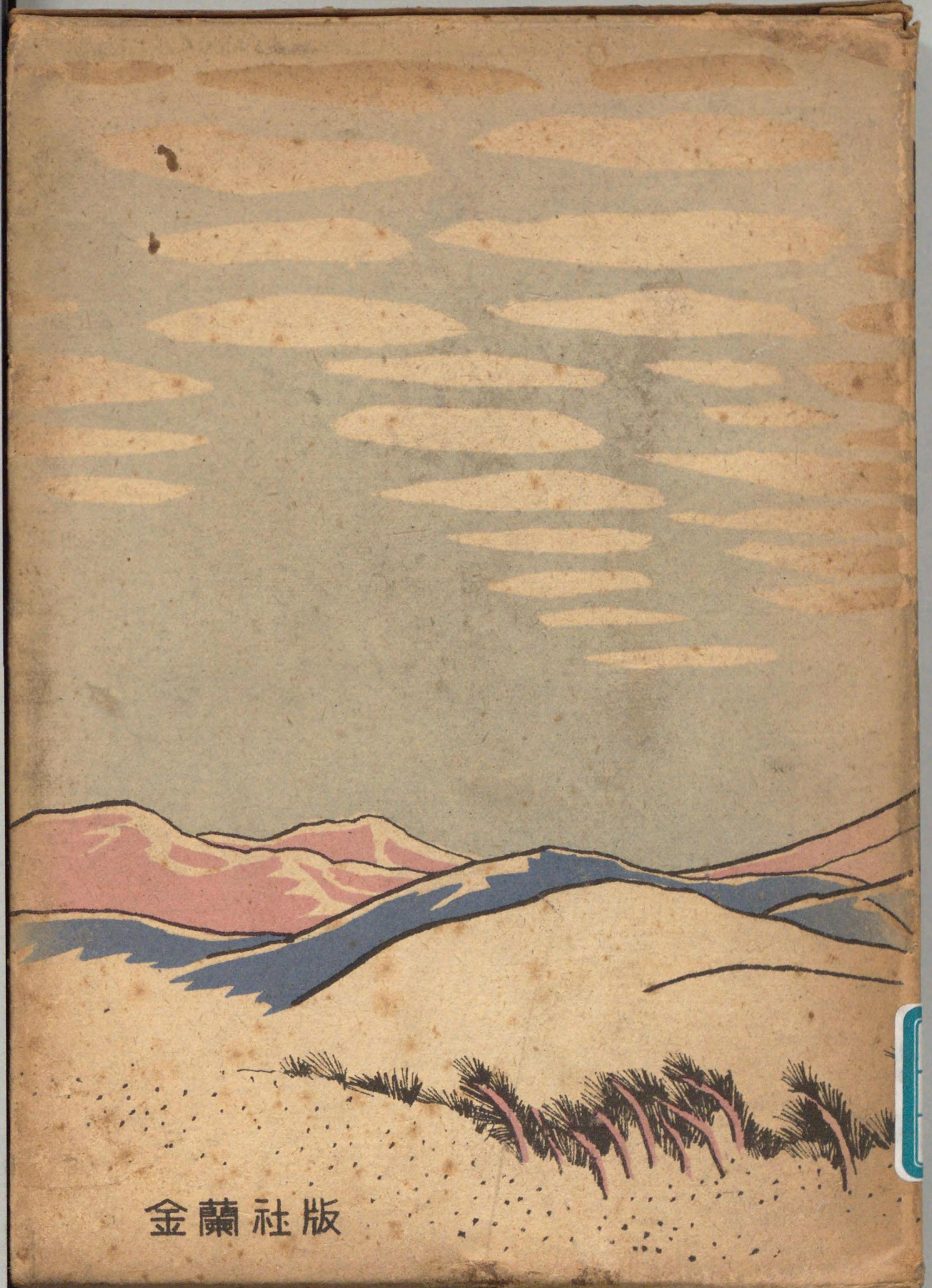
金蘭社版

少國民詩集

# 日本の朝

水谷まさる著





金蘭社版